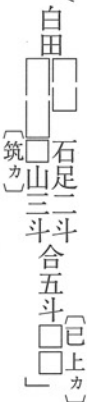


福島・大猿田遺跡（一九号）
おおさんだ

- 1 所在地 福島県いわき市四倉町中島字大猿田
- 2 調査期間 第二次調査 一九九六年（平8）四月～二月
- 3 発掘機関 調査主体 福島県教育委員会
調査機関 財福島県文化センター
- 4 調査担当者 財福島県文化センター（遺跡調査課）
- 5 遺跡の種類 集落跡（須恵器窯跡・自然流路跡を含む）
- 6 遺跡の年代 六世紀後半～九世紀
- 8 木簡の釈文・内容
二次にわたる大猿田遺跡の発掘調査では一〇点の木簡が出土したが、このうち一点を本誌第一八号に、八点を本誌第一九号に紹介した。

一九九七年度に刊行した『常磐自動車道遺跡調査報告一』においてもこれに沿って記述したが、報告書刊行作業と同時に進めていた保存処理によって新たに判読できる箇所や、変更すべき箇所が確認できたことから、以下の三点について釈文を訂正し、さらに一点を木簡として追加する。

なお、木簡の保存処理法は、高級アルコール含浸法によった。

- (1)  三斗
二斗
- ・「潤六月廿三日」 241×31×6 032 19(3)
- (2)  石足二斗合五斗
白田
[已上カ]
- ・「欠二升」 215×24×3 032 19(4)

- (3) 「領六申今日甚」 (281)×34×5 081 19(7)
- (4) 「欠」 (115)×25×(5) 049

(1)は、(2)とならんで、春米五斗の荷札木簡である。表面に二行書きの部分があり、「人名十三斗」「人名十二斗」と書かれていたと推定される。つまり春米五斗（一俵）を二人の人物で合成輸納した際の荷札木簡である。春米五斗（二俵）を複数の人物により合成輸納する例は、平城宮出土の荷札木簡にもしばしばみられる。

今回、裏面に「潤六月廿三日」という日付が確認できた。「潤」を「潤」と表記する例は、山形県大坪遺跡出土木簡にもみられる（本誌第一七号）。

出土する土器群は八世紀中葉を中心とする時期の様相を呈している。裏面の「潤六月」のある年をこの時期に求めれば、天平二年

(七三〇) か、神護景雲二年(七六八)となる。

(2)も、春米五斗(一俵)を合成輸納した際の荷札木簡である。表面は二行書きであり、「石足二斗」「山三斗」と、「人名+数量」が記載されている。両者の合計額が下部に「合五斗」と記されている。

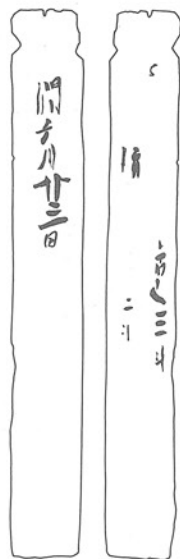
裏面は「欠二升」と判読できる。不足分を裏面に記したものと考えられる。金沢市上荒屋遺跡木簡に類例がある(本誌第一三号)。

(3)は、上半部の表面が削り取られており、現状では墨痕を確認することはできない。また、下端部も欠いている。残存する文字から判断すると、上申の文書木簡であると考えられる。現存の文字から強いて読みを推定すると、「…領六申す、今日甚だ…」となろうか。

(4)は、形状から封緘木簡とした。表面は腐蝕が進み木目の硬い部分が浮き上がった状態であるが、新たに墨痕が確認された。ただし文字は判読できない。裏面は割り裂いたままの面である。

なお、木簡の釈読については、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

(三上喜孝〈米沢女子短期大学〉・氏家浩子・大越道正)



(1)



(2)



(3)



(4)